

まぐらのそうし

枕草子

せいしょうなごん

清少納言

はる

ようようしる

やまわ

あか

春はあけぼの。やうやう白くならぬへヨもは、すじし明らして、

むらさき

くも

紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

なつ

よる

つき

やみ

お

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、

ほたる

おと

い

ひと

ふた

蛸のおほく飛びちがひたる。また、ただ一ひついなぎ、

ひか

ゆ

お

あめ

ふ

お

ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

あき ゆうぐ 秋は夕暮れ。 ゆうひ 夕日の暮して 山やまの端はいと近ちこうならたるに、

からす 鳥からすのなびいろく行くよと、 みよ 三つ四つ、 ふたみ 二つ三つなび

と えわ 飛びいそぐさへあはれなり。

から ちい みて 小さいく見ゆるは、いとをおかし。 まいて雁からなどの連つらねたるが、

ひい は かぜ おと むし ね 日ひい入り果はてて、 風かぜの音おと、 虫むしの音ねなど、 はた言いふうべきにあらさず。

冬はひとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、

霜のいと白きも、またさらでもいと寒きじ、

火などいそぎおしして、炭持てわたるも、いとひきびしきじ。

昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、

白き灰がちにならしてわろし。